

株式会社ワントゥーテンドライブ

広告代理店から「モノづくり企業」の代表経営者へ転身 新しいスタイルの「モノづくり企業」の先導役に

事業内容

AIやIoTの技術に対応したモノづくりが強み テクノロジーを利用した製品開発をサポート

「ワントゥーテンドライブ」は、クライアント企業の新商品や空間・新サービスの開発プロデュースを主力業務としてスタートした。

同社は、クライアント企業に協力して、製品の企画提案から、プロトタイプ構成、製品化までを一貫してサービスを提供している。VR(仮想現実:コンピュータ上に人工的な環境を作り出し、あたかもそこにいるかのような感覚を体験できる技術)やAR(拡張現実:現実空間に付加情報を表示させ、現実世界を拡張する技術)を利用した製品の開発も多く手掛けている。

梅田社長曰く、「消費市場が成熟化する中で新しい技術がどんどん出てきている。クライアント企業としては、新しいことにチャレンジしないと、新興勢力に潰されてしまう危機感がある。その中で、わが社のようなベンチャー企業でも、3Dプリンターのような新しいテクノロジーにより、大手企業と呼ばれるクライアントと目線を合わせて、新しいモノづくりが出来る環境になってきた」という。



代表取締役社長 梅田 亮 氏

外部人材活用・人材投資に注力した背景

テクノロジーを使った「モノづくり」への思いから、広告代理店から当社代表へ転身 デザイナーやエンジニアなどのエキスパート外部人材も多く採用

ワントゥーテンドライブは、「ワントゥーテンドesign(本社:京都市)」がワントゥーテンドesignグループとして、ホールディングス化したときに「AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)等の新しい技術に対応してモノづくりをしよう」として誕生した経緯がある。その時、ワントゥーテンドesignの代表取締役社長に就任したのが梅田氏だ。梅田氏は前職、大手広告代理店での勤務経験を持つ。

広告代理店の仕事は、マーケティング・プロモーションの強化というサービスの性質もあり、広告以外のことも手掛けてきた。企業・製品のブランディング、PR戦略などの仕事や、食品メーカーとは、製品企画開発から携わることもある。そんな中で、モノづくりも新しいテクノロジーが出てくる中、もっと根本から発想を変えて、ITを活用すればより良いモノが創出できるという思いがあり、経営者に転身し当社のビジネスをスタートした。

「ワントゥーテンドesignは、広告制作プロダクションと

して優秀な存在でメディア等にも多く掲載されていた。ワントゥーテンドesignグループの代表の澤邊氏とは、いつか一緒に仕事がしたいと思っていた」と当時を振り返る。梅田氏もメディアに掲載されることも多く、お互いが相手の存在を知っていた。そんな折、澤邊氏から「モノづくりをワントゥーテンドesignとして分社化する。代表としてやってほしい。」という話があり、快諾し当社の代表に就任した。

創業当初の半年間は、3名で事業を運営していたが、現在、社員数は現在24名。「当社は、モノづくりに特化しているので、専門人材を多く採用しないと仕事が広がらない」と考え、プロダクトデザイナーやエンジニアなどのエキスパートなどの外部専門人材も多く採用しているという。



ワントゥーテンドesign オフィス内(京都市)

株式会社ワントゥーテンドライブ

〒600-8411 京都府京都市下京区烏丸通四条下ル水銀屋町620 COCON烏丸4F
TEL: 075-371-2017 FAX: 075-371-2026
<http://www.1-10.com/drive>

〈代表者名〉梅田 亮
〈創業年月〉平成27年1月
〈資本金〉1,000万円
〈従業員〉24人
〈業種〉新商品開発プロデュース
空間・新サービス開発プロデュース

外部人材活用の成果と今後の展開

プロトタイプを生み出す原動力 新しいテクノロジーに触れるプロジェクト「試作室」

ワントゥーテンドesignの持ち味は、企画段階からクライアントに入りこんでいけることが強みである。新しいテクノロジーを活用したクライアント、企業側にその経験がないケースが多いため、企画開発段階から参加することで非常に重宝される。プロトタイプを作り、早い段階からクライアントにも触ってもらい、ブラッシュアップしていくのが当社のスタイルである。

組織内には、「プロデューサー」と「スタッフ」という職種がある。プロデューサーは、自社と相性の良いクライアント企業と関係を作り、引き合いが来ると企画からプロトタイプの製作、プロダクト(生産)まで一貫して担当するという。その際、プロデューサーがスタッフを集めてプロジェクトチームを立ち上げる。プロデューサーで常時5~10件の案件を受け持ち、スタッフは、1~3件のプロジェクトに参加している。マルチタスク機能をこなしていく戦力が整っていることも当社が選ばれる理由のひとつとなっている。

ワントゥーテンドesignの独自の取組として「試作室」というプロジェクトがある。これは、新しい技術を採用したデバイス(機器・装置・パーツ)が発売されたとき、エンジニアに一定の権限を与えて、自由に購入し試すことが出来る取り組みだ。新しいテクノロジーに触れることにより、新しい発想や自社製品の開発に活かしている。

この取組での成功事例がARの技術を使った「銃のおもちゃ」である。銃型のデバイスを向けると取り付けたスマートフォン端末を通してお化けの標的が出てくる。映し出されている現実の空間に仮想の弾を撃って遊ぶ製品である。この製品は、Google Tango テクノロジーに対応するスマートフォン端末が発売されたのを機に、エンジニアが購入し触りだしてから、2日でアイデアを出してきたと云うから驚きである。これらの取組は全社員が参加し企画内容を発表する場を設け、スラック(ビジネス向けチャット)上で共有される。

「従業員の稼働時間の20%位を使って好きにやってもらっている。エンジニア・デザイナーも試作室という取組が好きで、良い意味で公私混同。試作室ですることの多くは寝かしているが、新しいテクノロジーに触れておくのは、ある種の準備運動で、自社製品開発にも、受託案件にも役だっている。」と代表は話す。

今後は、これらの蓄積したノウハウを活かして、受託案件のみならず自社開発に力も入れていく。



現実の空間に仮想の弾を撃って遊ぶ玩具「snipAR(スナイパー)」(拡張現実アクション「オバケハンター」ZONE02で利用している)

